オンラインを利用したダンスクラスの活動報告
――コロナ禍でのフィールドワークに関する覚書――

菅　野　　淑

1．はじめに

2020 年、日本のみならず世界中がかつてない危機に晒された。この状況は、この文章を執筆している現在でも継続中である。2019 年 12 月以降、中国湖北省武漢市を中心に発生した新型コロナウイルス感染症（COVID-19、以下コロナ）は、瞬く間に世界中に広がっていった。死者数は世界で 150 万人強、感染者数も 6,500 万人（2020 年 12 月 4 日現在）を超え、その数はいまだ増え続け、変異種が見つかるなど、収束の目途はたっていない。

世界規模での感染拡大を受け、日本政府は 2020 年 4 月、緊急事態宣言を全国に発令し、外出自粛の要請をおこなった。学校は休校措置となり、また企業等もリモートによる就業を余儀なくされた。実際には 3 月頃から多くの行事が相次いで中止となり、人々の活動は制限されていった。

筆者の専攻分野は文化人類学（以下、人類学）であり、研究対象地域はアフリカ・セネガル共和国および日本国内だ。セネガルのダンスや太鼓(サバール)の音楽活動を実践している人々がその対象だ。筆者自身、ダンサーとしてパフォーマンス活動もおこなっており、現場で人と会うことなくして研究も活動も成立しない。現地に赴き、現地の人々と共に生活しつつ、彼らの社会や文化を調査する参与観察を中心としたフィールドワークは、人類学者にとって専売特許のようなものだ。フィールドで自らが体験し得たナマの情報を生き生きと伝えることは、人類学者に課せられた役目のひとつだと筆者は考えている。しかし 2020 年､それが不可能になった。どこにも行けないのである。

2020 年 3 月にセネガル調査を実施しようと 1 月頃に思案しつつも、コロナが流行し始めていたこともあり、筆者は諦めていた。それでも、当年 12 月末にはセネガルに渡航するために本学の助成金を獲得していたため、現地調査はできると信じて疑わなかった。しかし、その計画は脆くも崩れ去ったのである。

筆者のみならず、多くの文化人類学者、その他フィールドワークを調査手法の一環とする学問の研究者および学生たちは、一斉に「何もできない」状況に立たされた。もちろん、これは世界中の人々が同様に、それぞれの立場で絶望的な状況に陥った。しかし人々は、次第に活路を開いていく。オンラインの利用だ。コロナの感染が拡大するまでは、さほど主流ではなかったオンラインが急速に市民権を得た。執筆している現在、筆者自身も講義や打合せ、飲み会、

墓参りなど、オンラインを利用し様々なことを抵抗なくおこなえるようになっている。

筆者は 2020 年 4 月よりオンラインを活用し、日本人のダンス愛好者と活動を始め、また日本国内外在住のセネガル人ダンサーのダンスクラスを受講し続けている。本論文では、筆者の経験に基づき、オンライン活動に至るまでの経緯と、クラスの実態について報告をおこなうことが第一の目的である。また、従来型のフィールドワークを実施することが困難となっている今、これらオンラインの活動実践を通じて、新しいフィールドワーク法の可能性を探ることが第二の目的である。

2. 人類学とフィールドワーク

人類学においてフィールドワークは欠かせない調査方法だ。元来人類学は、文明の地から遠く離れたいわゆる「未開」の土地に住み込み、そこに住む特定の人々（民族）を調査し、生業や信仰、社会組織などを記述・分析する学問だった。人類学のフィールドワークと言うと、20 世紀初頭にトロブリアンド諸島で調査をおこなった、ポーランド出身の英国人類学者マリノフスキが想起される。氏は 2 年あまりに渡り、トロブリアンド諸島で人類学的調査をおこない、その成果をまとめた『西太平洋の遠洋航海者』を 1922 年に刊行した。現地に長期滞在し、現地の言葉を話し、生活に密着した調査をおこなった成果は、人類学の歴史において多大な影響を与えるものだった。

マリノフスキの報告から 1 世紀の間、人類学におけるフィールドワークの様相は大きく変化していった。研究対象も、「未開」で「野蛮」とされていたものから、あらゆる場所、人々、事象へと変化している。フィールドワークの概念も拡張し、多様な場において活かされており、人類学の専売特許ではなく、多くの学問領域、さらには民間企業などにおいても取り入れられる手法となっている。つまりフィールドワークは、「人々が『他なるもの』と出会い、交わり、分かり合おうとする営み」（中尾・杉下編著　2019：11）であり、「参与観察は人々とともに学ぶ」（インゴルド　2020：19）ものへと変化したのである。

このように、多分野で応用されるようになったフィールドワークではあるが、人類学において重要な調査手法であることに変わりはない。文化人類学を学ぶ学生らは、長期間現地に滞在するし、教員や研究者も学生時代と同様とまではいかないにしても、現地に赴き調査研究を進めてきた。それが、コロナの世界的流行によって、実質不可能になったのである。それでも人類学者やその他のフィールド・ワーカーたちは、その状況に対応しようとしている。

3. コロナ禍でのフィールドワーク

コロナの感染拡大が進む中、日本の文化人類学者ら数名が中心となり、2020 年 3 月 29 日にラウンドテーブル「COVID-19 と文化人類学」がビデオ会議システム ZOOM を利用し、開催された。本フォーラムの具体的な内容は割愛するが、当日は 80 名以上の参加があったという

ことで、多くの注目・関心を集めたと言える。その後も Facebook 上でグループ「COVID-19 と文化人類学」が作成され、関心のある者は申請すれば参加できるようになっている。フォーラム以降も、連続 web セミナーが開催され、議論が継続的になされている。

コロナ禍におけるフィールドワークの可能性について、近藤らは、「……参与観察法や民族誌的インタビューは一時的に採用しづらくなるが、……ビデオ会議システムや SNS など情報技術を活用したオンライン調査法を積極的に採り入れることもひとつの方策」（近藤他 2020：368）と述べている。また、「海外渡航が強い制限がかかる中で、世界各地に住む研究者の記述が集積され、それらをまとめて編集することで民族誌記述が成立すれば、新しい研究のスタイルと呼びうるかもしれない」（近藤他　2020：368–369）としつつも、オンライン調査でのネット環境の考慮や調査倫理の再検討は必須だとしている。

教育面にも、コロナは大きな影響を与えた。2020 年 9 月 19 日には「日本学術会議　公開オンラインシンポジウム　コロナ時代におけるフィールドワーク教育をめぐって」が開催され、フィールドワーク教育を今後どう行っていくかの検討がなされた。

また、東京外国語大学が開設している web ページの特設サイト「COVID-19 とフィールド・ワーカー」[1] では、世界各地をフィールドとする研究者らが、コロナ禍での現地の様子を報告するとともに、専門的見地からコロナの影響について考察している。

このように 2020 年に突如訪れた「災難」に、人類学者やフィールド・ワーカーは立ち向かおうとしている。今後、数多くの研究者らが報告、議論を重ね、ポスト／ウィズコロナに向けた、新たなフィールドワークのスタイルが創出されていくだろう。本稿もその一助となればと思う。

4. オンライン利用の開始

では筆者はいかにして、フィールドワークをオンラインでおこなうようになったのか。当初、筆者がオンラインで日本人の愛好者らとやり取りを開始した頃は、それをフィールドワークとして捉えていたわけではなかった。

筆者がコーディネートしているサバール・ダンスクラスは、施設の開館停止により 2020 年 3 月から開催が中止。またパフォーマンス予定だったイベントも全てキャンセルとなり、フラストレーションが溜まっていた。そこで、日本各地に住む知人の愛好者らに、テキストメッセージで「踊れない、太鼓を叩けない」フラストレーションを伝えたところ、皆が同様の心情だということが分った。やり取りを続けるうちに、それならば時間を設定し、ビデオ通話を利用してダンスの練習会をしないか？という話になった。

こうして筆者の住む名古屋、京都と神戸の 3 地点を繋ぎ、4 月 5 日日曜日 15 時に初めてオンライン練習会が開催された。参加者は筆者を含め、3 名。うち 1 名は、セネガルに 2 月から滞在していたが、感染が拡大し、セネガルの国際空港が 3 月中旬に閉鎖される直前に緊急帰国した。もう 1 名は、3 月下旬にセネガルに渡航する予定が、空港が閉鎖になったため渡航でき

ずにいた。

練習会と銘打ったが、実際にはセネガルに関連する話と、渡航していた愛好者が滞在中にどのようなダンスクラスを受けたのか、また、今セネガルで一番新しく人気のある bakk（バク）[2] とダンスは何か、などについて話をすることに多くの時間を費やした。さらには、東京に住むセネガル人ドラマーや、広島在住の愛好者にもアポイントなしに電話をかけ、ビデオ通話のメンバーに追加した。ひたすら喋り続けていたが、少しは練習しようということになり、滞在していた愛好者が習ってきた振り付けを共有してもらい、踊った。通話時間は最終的に 4 時間に及んだ。

この練習会では、無料通話アプリ Messenger と WhatsApp 双方のビデオ通話を試してみたが、途中からでもメンバーを追加もできることから、Messenger を使用することになった。オンライン練習会という名の「お喋り会」は、参加者全員がどこにも出かけられず暇であること、家族以外の人と会話がしたいということ、少しでも体を動かしたいということから、毎週日曜日 15 時に開催することが決まった。この会は 4 月以降毎週続いた。

筆者以外の 2 人はイスラームだ。4 月 24 日から 5 月 23 日までは、イスラームの断食月ラマダン期間だった。早い時間から踊るのは身体的に厳しいため、開始時間を 16 時に変更した。しかし、何もせず家にいるよりも会話をしている方が断食の辛さに耐えられる、ということで会自体を止めることはなかった。ラマダン期間中は、日没時間少し前になると全員が台所に立ち、それぞれンドゥク（＝イフタール：日没後最初に食べる食事）の準備をしつつ会話を続け、日没の時間になると全員で画面を通じて共に食事をした。筆者はイスラームではないが、彼女たちと同様の行動をとった。ラマダンが明けた後も開始時間は、16 時に固定された。

5.「チャレンジ動画」へのチャレンジ

世界的な自粛期間中、様々なモノゴトにチャレンジし、その様子を SNS に投稿する「チャレンジ動画」が流行した。2014 年、ALS（筋萎縮性側索硬化症）の研究支援のためにおこなわれた「アイス・バケツ・チャレンジ」が、一連のチャレンジ動画の発端ではないかと筆者は推察している。この自粛期間中、様々な種類のチャレンジ動画がインターネット上に投稿されていた。例えば、世界各地の女性が「スッピン」で部屋着姿の映像から、一瞬で華やかな衣装を身にまとい、化粧をしっかり施し、美しく「変身」するもの。有名ダンサーが考案したダンスの振り付けにチャレンジするものなど、多くの動画が投稿され、世界中を巻き込んだ現象となった。

筆者も今回、いくつかの「チャレンジ」に参加した。ひとつ目は、日本でアフリカンダンスやサルサ、ベリーダンスやバリ舞踊など、世界各地の民族舞踊を愛する女性らによる変身動画。二つ目は、ロンドン在住のセネガル人ドラマーが考案した bakk をコピーして叩く、サバールドラムチャレンジ。三つ目は、オランダ在住のセネガル人ダンサーが振り付けた踊りをコピーして踊る、サバールダンスチャレンジ。四つ目は、京都在住のセネガル人ドラマーが創作した

新しい bakk に、ダンスの振りを付けるチャレンジだ。これは、オンライン練習会のメンバーで挑戦した。

チャレンジ動画は、たいてい長くて 30 秒ほど、変身動画に至っては変身前と後で 1 人につき 15 秒ほどに編集される。しかし、振り付けに挑戦した bakk の場合は 1 分と長かった。また、太鼓 1 台による単音ではなく、提供したドラマーが複数の太鼓パートをそれぞれ演奏録音し、アンサンブルとして編集した動画であり、リズムは複雑だった。

練習会のメンバーは全員、長らくサバールを愛好し、ダンスのみならずドラムの演奏技術も少なからず習得しているとはいえ、新しく創出されたリズムフレーズに振りを付けるのは初めての経験だった。まずは提供者に、主旋律となるパート部分の口太鼓[3] を録音してもらい、それを文字起こししたものを覚えることから始めた。そして、1 分ある動画を小分けにし、少しずつ振り付けを考えていった。完成するまで 1 か月近くかかった。筆者らは、今回の振り付けで「サバールらしさ」、つまりセネガル現地のダンサーが創り出しそうな振りを付けることを目標としていた。過去に習った振り付けや、現地のプロモーションビデオ等を見ながら、筆者らが「サバールらしさ」を感じることができる振り付けを抽出していった。

筆者は、他のメンバーが考案してくれた振り付けに少しコメントを述べる程度で、ほぼ何も協力できなかった。これまで、短い振り付けを考えることは何度もあったが、単にセンスがないため、良い振り付けを思いつくことができなかったのだ。だが、このチャレンジにおいて、既存の耳馴染みのあるダンスリズムにソロで踊るのために振り付けを個々で考える過程や、クラスで生徒に教えるために振り付けを考える過程とは違う流れを経験することとなった。全く新しく聞くリズムに振りを付けることは、非常に困難な作業だった。リズムへの理解がなければ、いくら振りを付けてみても、音に合わないチグハグなものになってしまう。音そのものを理解し、耳と体にそれを染み込ませるまでに時間がかかった。

「サバールらしさ」、音とステップや動きを合わせる、同じ振り付けを繰り返さないなどを追求し、完成した振り付けは、筆者たちの満足のいく出来栄えだった。それぞれが自宅で衣装を着用し踊ったものと、考案者であるドラマーが演奏している映像を編集し、ひとつの動画として SNS に投稿したところ、日本人、セネガル人を問わず、多くの称賛を得ることができた。

このチャレンジは、思わぬ収穫だったと言える。なぜなら、セネガル人のプロのダンサーが振り付けを考える際には、アンサンブルの中でどの旋律を抽出してステップに組み込むか、など、今回のように非セネガル人の愛好者が振り付けを創出する際との比較研究に活かせると考えたからである。これは、改めて検討していきたい。

6. オンラインクラスの開始

5 月頃になると、各地で少しずつオンラインでのクラスが開始される。日本でも、関東在住のセネガル人ダンサーが定期的に開催していたクラスをオンラインに変更し、平日の夜（火曜日、水曜日 19 時ないし 20 時開始）と週末の昼間に実施し始めた。料金は、1 時間（のちに 1

時間 15 分）1,600 円である。このクラスは、月に 1 回程度、セネガルに住むダンサーや欧米に移住したセネガル人ダンサーを招聘し、スペシャルクラスを開催している。筆者も時折参加している。

この頃には、欧米を中心とした海外でもオンラインクラスが頻繁に開催されるようになっていた。昨年までは金土日に集中しておこなわれていた大規模なワークショップ合宿が、オンライン開催に変更されたりもした。しかし、日本の時間帯には合わないものが多かった(例えば、日本時間で夜中の 2 時や朝方 4 時開始、月曜朝 6 時開始のものなど)。日本人の愛好者らからは、例年ならば、直接その国に行かなければ受講できない講師のクラスを、オンラインで受けられるのなら受けたいとは思うが時間帯的に厳しい、という声が多数聞かれた。それでも早起きして受講した人も、複数名いたようだ。

先述したオンライン練習会は、変わらず毎週日曜日夕方に開催しており、セネガル在住の日本人や関東在住の愛好者らとも繋ぎ、活発におこなわれていた。ある時、1 人の愛好者が、オランダ在住のセネガル人ダンサーが、ンバラ mbalax（セネガルポップス）のオンラインクラスを開催している、という情報を SNS 通じて得た。一度受けてみるので、良ければ日曜日の練習会の時間にクラスを開催してもらえないか交渉してくれることとなった。結果、日曜日に開催されることになった。

このクラスは当初、日本時間 18 時から 1 時間だったのだが、講師側が教える都合上 1 時間半に延長された。料金は、申し込みサイトのマージン込みで 8.7€（日本円で 1,000 円程度)、1 時間半に延長された後は 11.20€（1,500 円程度）となった。講師 P は非常に熱心なダンサーであり、踊ることに誇りをもっている。オンラインでいかに教授できるか試行錯誤し、また生徒にもどういったクラスが受けやすいか、など個別にメッセージで問い合わせるという熱心さである。このクラスに参加している日本人の愛好者は、これまでに数多くのセネガル人講師に習ってきたが、ここまで情熱的に生徒と向き合う講師は初めてであり、驚きとともに非常に好意的に受け入れられた。ある参加者は、この講師の熱心さを SNS 上で宣伝し、新たなメンバーを取り入れるのに一役買った。

P クラスには、ヨーロッパからの参加者よりも日本人が多く参加している。これまで日本人との接点は、非常に少なかったにも関わらず、である。日本で外出がある程度できるようになってから参加人数は少なくなってきているが、関東・名古屋・関西の生徒が、多い時は 10 人弱参加している。参加者は自宅か、居住マンション内のレンタルスペースなどを借りて参加している。

当初は在住するオランダからだったが、講師の都合により途中から一時帰国したセネガルから配信されている。一度だけ、セネガルが前夜からの大規模停電でインターネット接続ができず、開始時間が 1 時間遅くなったことがあったが、それ以外は大きなトラブルもなくクラスを継続している。開始時間は基本的には、ヨーロッパ時間（CET）に合わせてある。しかし、講師がセネガルに帰国した時から、日本の開始時間は 19 時に変更された。セネガルは日本時間より −9 時間である。

7. オンラインクラスの支払い

オンラインクラスの料金支払いは、基本的に電子マネーによるオンライン決済だ。日本でのオンラインクラスの場合は、PayPay か PayPal を利用して支払う。先方が支払いを確認した後に、知らせたメールアドレスに ZOOM のアクセス URL が送られてくる。開始時間にその URL にアクセスすれば、参加できるという流れだ。

講師 P のクラスの場合は、専用の仲介 Web サイトを通じて申し込む。そのため手数料が 1.2€ かかる。このサイトでは PayPal の他、クレジットカードなどが使用できる。クラス開始 1 時間前には受付が締め切られる。サイトから講師への支払いは､1 週間後になるとのことだ。

電子マネーを使用するメリットは､やはりわざわざ銀行に振込みに行かなくて良いところだ。ましてや、海外に手数料なしで送金できるのは、ありがたい。コロナが収束したとしても、こういった電子マネーによる支払いは定着していくのではないだろうか。

8. オンラインクラスのメリットとデメリット

オンラインクラスのメリットは、何より自宅で手軽に受けられることだ。それ以外にもいくつか挙げられる。

・仕事帰りなどで開始時間に間に合わず、遅れて参加ということがない。
・開始時間ギリギリまで他のこと（家事など）が可能。また終了後も同様。
・汗をかいても、そのまま自宅でシャワーを浴びることが可能。
・周囲の参加者の目を気にせず、踊ることができる。
・受講料が安い（通常価格は 2,500 円～ 4,000 円／ 1 時間半）。
・移動の手間を省け、交通費もかからない。

自宅で時間になればクラスを受講できるということは、とても気軽で気楽である。開始時間まで夕食の準備をし、クラスが終わったら直ぐ食事をとることも可能だ。また、料金が安いことも連続受講できる理由のひとつになるだろう。

では、続いてデメリットを挙げよう。

・全力で踊ることができない（住環境）。
・インターネットの接続が不安定になることがある。
・ZOOM でホストが音を共有すると、音と映像のズレが生じる。
・講師の動きが分かりにくい時がある。
・生音（生の太鼓演奏）で踊る高揚感を得にくい。
・サバールの醍醐味である太鼓とダンスの即興性を感じられない。
・仲間と楽しさを共有しにくい。
・クラス終了後に仲間や講師との語らいや食事など、交流を深めにくい。

住環境は大きく影響する。例えば筆者は集合住宅に住んでいるため、踊る際は非常に気を使

う。サバールダンスは跳躍するステップを中心に、足をかなり動かす。そのため、足音が響きやすい。なるべく階下に迷惑にならないよう、フワッと踊り、足音を響かせないことに神経をとがらす。しかし、そう踊っていると画面の向こうで動きを確認している講師から、「シュク、もう少し体全体を使って踊って！」と言われてしまう。また、部屋も広くないため、前後左右限られた空間の中、全力で踊る、ということは容易ではない。これは他の受講者も同様だ。住人から注意を受けたため、レンタルスペースを借りることにした人もいる。家族と同居している人は、その家族に気を遣う場合もある。自宅で気兼ねなく踊ることができる人は、そうそういない。気兼ねなく思い切り踊りたいのに、それができないというフラストレーションは溜まる。

ネットワーク接続の不安定さ、音と映像のズレ問題はより深刻だ。これは、講師がセネガルにいるからではない。どこにいても、不安定な時は不安定だ。講師が画面上で固まったり、コマ送りのようになったり……しかし講師は気づかず進めていく。また、映像はリアルタイムで届いていても、音のみが後から遅れてやってくる場合もある。サバールダンスは、音と体の動きが一致することが魅力のひとつなのだが、それがズレた映像になってしまうと一気に理解が難しくなる。それは、非常にストレスを感じる現象だ。講師は、ZOOM で音を「共有」に設定し流しているのだが、自身はリアルタイムに聞こえ、その音に合わせて踊っているので、ズレに気づかず、こちらのストレスは通じにくい。ある時筆者が、映像配信している PC そのものから音を流すのではなく、講師の手元にあるスマートフォンから音楽を流せば音のズレが解消するのではないか、と提案した。実際に試したところ、音のズレは比較的解消することができた。

接続のみならず、PC カメラの位置や鮮明度によって、講師の動きが分かりにくいこともある。画面を通してだと、細かい足のステップは掴みにくい。筆者にせよ他の受講者も、サバールダンス歴が長いため、経験的に手足の動きや次に続くステップの予測はある程度できる。そのため概ね動きは捉えやすく、覚えは早い方だろう。それでも、画面を見ていると時折どう動いているか分からなくなることがある。経験者でさえそういう状況になるのだから、初心者が受講する場合は理解がより困難なのではなはいかと推測する。講師側もこういった問題に対応するため、前向き後ろ向きのどちら方向でも踊ったり、口頭での説明を多くしたりと工夫している。

受講者らとメッセージのやり取りをしていると、やはり「生音」、つまり生の太鼓の演奏に合わせて踊りたい、という声が多く聞かれる。もちろん、セネガルポップスのように音源を利用して踊ることもあるが、やはりサバールダンスの醍醐味は、太鼓の生演奏に合わせて踊ることだ。あの感覚を味わうことがオンラインではできないのだ。もちろん、オンラインであっても踊ることは楽しい。しかし、やはりどこか物足りなさを感じる。あの高揚感はない。

さらに、仲間と踊る楽しさを共有できない、ということも大きなデメリットと考えられる。共にサバールが好きなもの同士が集まり、真剣に踊りに取り組みながらも、途中途中で話をしたり、振り付けについて確認したり、そういった仲間とのふれあいができず、独り言でやり過

ごすしかないことは、とても淋しい。もちろん画面上には仲間がいるのだが、基本的にクラス中はホストの講師以外は音がハウリングしないように、ミュートに設定しているため、互いの声は聞こえない。画面上で、他の受講者の動きや表情をたまに確認するのみだ。自粛期間が明けた後、同じ地方に住んでいる数名がスタジオなどを借り、一緒にオンラインクラスを受講していたことがあった。いつも以上に楽しそうなことが画面からも伝わっただけではなく、終了後に「やっぱり皆で踊ると楽しい」という言葉を述べていた。

これに通じることであるが、クラス後にお喋りができないことも淋しさを感じる要素である。クラスの最後には、全員ミュートを解除し、お礼や挨拶等をするのだが、直ぐ終了し、あとは自宅のいつもの空間というのが現実なのだ。対面でクラスを受けていれば、終了後皆で着替えをしながら今日のリズムや振り付けのこと、その他近況報告などしつつ、帰りの車内や、駅に歩いて向かう際中に様々な話ができる。皆の都合が合えば、そのままご飯を食べに行き、さらに話をする。そういったことができないのだ。クラス後に、受講者で作成したSNSのグループチャットでクラスの感想などを送り合うこともあるが、限定的で短い時間に過ぎない。

このように、オンラインクラスにはメリットもあるが、対面でおこなわれるクラスと比較するとデメリットが多いようにも感じられる。とはいえ、以前のように人が集まる状況をなかなか実施できない今、オンラインクラスの需要はある。講師側としても、これまでの対面式の場合は近郊在住の生徒しか集められなかったが、オンラインによって遠方に居住する他地域の生徒のみならず、海外からの参加者も見込めるようになった。これは非常に大きなメリットと言えるだろう。

9. オンラインでのフィールドワーク

コロナ禍でやむを得ず、オンライン練習会やダンスクラスで参与観察することになったが、これをフィールドワークと言って良いのかは疑問である。そもそも、「フィールドワークをするつもり」で練習会やクラスに参加したわけではない。筆者個人の楽しみ、ストレス解消のひとつとして参加していただけだ。だが、その過程で、これまでの状況では見えずにいた事象や、新しいネットワークが創出される可能性を発見するに至った。こうしたこともあり、参与観察し始めたのだ。参加者への同意は、後から得た。

オンラインでの参与観察でのメリットは、時間を区切っておこなえることだろう。わざわざ「異世界」に足を踏み入れなくとも、日常の中でその時間のみ参与することができる。まさにダンスクラスへの参加と一緒だ。フィールド先に滞在していると、限られた期間に詰込み型で調査をしがちであり、また、なかなか現地で客観性を保つことは難しい。しかし、オンラインの場合、接続を切ってしまえば日常に戻り、物理的／心理的な距離を置いて客観的に対象物を見ることができる。ただ、オンラインで被験者とのラポール（信頼関係）を構築できるかと言うと、些か問題がある。

今回筆者は、以前から親しくしていた愛好者らと練習会を始めた。また、オンラインクラス

が開始されてからも、日本からの参加者は全員顔見知りの関係だった。P 講師とは初対面だったが、サバールに携わっている人々はたいてい知り合いの知り合いであることが多く、P の場合もそうだった。筆者も P も、長きに渡りそういった関係性の中に身を置いていたこともあり、抵抗なく関係性を構築していけたように思う。

このように考えると、オンラインでのフィールドワークは、既に関係性ができている相手だから成立するものなのかもしれない。しかし、これはあくまでも筆者個人の経験から得たものなので、他の研究者がどのように報告されるかは分らない。また、筆者の場合は、ダンスクラスという人が集い、踊るという全員が同じことをする場での参与観察が主だったため、入りこみやすかったのかもしれない。だがやはり、実際に顔を合わせない、雑談などをする時間をとることができない中で、どこまでラポール形成に至れるかは分からない。

10. オンラインダンスクラスのこれから

2020 年 12 月現在、オンラインクラスは継続されているが、10 月頃より日本国内でも対面でのクラスも、感染対策を充分に施した上で再開されつつある。しかし、再び感染拡大となり、施設によってはダンスでの使用は見合わせようとしているところもある。ヨーロッパクラスなどを見ても、9 月頃から再開されていたが、再びロックダウンに入った国もあり、コロナ以前の状態に戻るのはまだ時間がかかるだろう。例年、年末年始にかけ、世界各地に散らばったダンサーやドラマーらが主宰し、セネガル現地で開催されるワークショップ・ツアーも今回は、ほぼ開催されない見込みだ[4]。もしかするとオンラインでの開催があるかもしれないが、現時点で筆者は情報を把握していない[5]。

世界的にオンラインでの繋がりが密になったこともあり、今後もこの形態は続く可能性があるだろう。コロナが落ち着いた後も、ひょっとするとオンラインと対面の併用が主流になっていくかもしれない。実際に、既に併用型をおこなっているクラスもあり、遠方に在住している人も、自粛期間終了後も継続してクラスを受講することが可能になっている。講師は、これまで以上に、生徒を獲得するチャンスが広がったと言えるだろう。ただ、「オンラインクラスに飽きた」、「やはり対面クラスの方が踊りやすく、オンラインクラスではテンションが上がらない」、という声も出てきており、今後の動きは注視すべきところである。

11. まとめと今後の展望

今回、オンラインクラスでのフィールドワークを通じて、見えてきたことを検討したい。

まず、オンライン練習会でチャレンジした bakk にゼロから振りを付けていく、という過程についてだ。振り付けを考える、という行為は決して簡単なものではない。おそらく、他のジャンルでのダンスでも同様だろう。音／音楽をきちんと聞き込み、理解せねば不可能な行為だ。セネガル現地で新しい bakk が創られると、ドラマーらはそれを繰り返し演奏する。ましてや、

人気歌手の歌に挿入されている bakk なら、TV や SNS を通じて一気に広まり、それを人々は真似する。そんな踊り手のために、ドラマーはイベントでそれを叩く。もし街中のドラマーが考案した bakk ならば、身近にいるダンサーがそれに合わせて振り付けを考え（逆も然り）、ダンスイベントで披露する。日々、彼らは競うように bakk を生み出している。そういった彼らにとって、振り付けを考えることは新規性やインパクトが必要ではあるが、経験値によって生み出すことが可能だ。だが、筆者ら日本人の愛好者にとっては、難儀であった。今後、非セネガル人の愛好者が教示による実践ではなく、ゼロから創出していく過程は検討の余地があるだろう。

次に、料金の支払いについてだ。近年、セネガル現地でのクラス代金が高額になってきていた[6]。しかし、オンラインのクラスは比較的安価に受講することができる。これが今後の料金体系に影響してくるかどうか、変化を見続けたい。また、オンライン決済という支払い方法は、その手軽さからこれからも浸透していくのではないかと推測する。

オンラインクラスによって、新たに海外とのコネクションが生み出されたと言える。筆者は、SNS によって世界各地の実践者（愛好者も含む）がサバールを介して繋がるネットワークのことを、「仮想サバール・コミュニティ」と呼んできたが、それが今回のコロナで拡大したのではないかと考える。つまり、オンラインクラスになると国内のみの参加ではなくなるからだ。毎週のように画面を通じて顔を合わせれば、一種の同士のような感覚になっていく。これまで海外の実践者や愛好者と繋がるためには、セネガルに滞在中に出会うか、欧米の合宿に参加するしか機会がなかった。それが、いとも簡単に、海外に行かずとも出会えたのだ。それぞれの自宅の、画面の中で。2020 年、コミュニティはあっという間に拡大した。オンラインクラスでの印象が良ければ、いつか実際にその講師のクラスを受講したいと思うようになるだろう。それは、海外へ行く契機となる。受講者自ら行くのみならず、招へいという形で講師を日本に呼ぶこともあるだろう。現在筆者が参加している P のクラスを受けに、いつかオランダに行きたいね、という話を他の参加者としている。オンラインでの評価がリアルへの集客に繋がるのだ。

2020 年、世界はコロナウイルスによって大きな変化を余儀なくされ、できないことが多くなってしまったが、オンラインクラスのように代わりに生み出されたものも多数あった。今回、筆者自身図らずもおこなった参与観察によって、これまでは気づくことのできなかった点に意識を向けるきっかけとなった。「コロナのせいで」とモノゴトに対して批判的に言われがちではあるが、「コロナのおかげで」サバールのネットワークは拡大したと筆者は考えている。今後、このオンラインで形成されたネットワークが、既存のサバール・コミュニティにどのように影響していくか、また、オンラインからリアルになった場合、どのように活動が広がっていくのか、引き続き注視していきたい。いずれにしても、ポスト／ウィズコロナにおいても、オンラインのネットワークコミュニティはますます拡大していくだろう。

注

1　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）のフィールドサイエンス研究企画センター（FSC）拠点のプロジェクト「Fieldnetフィールドワークをする研究者の知と知をつなぐ」のwebサイト内に2020年7月に特設された。https://fieldnet-sp.aa-ken.jp/（2020年12月4日最終閲覧）

2　リズムフレーズのこと。

3　サバールで叩く音は全て口頭で言い換えることができる。そのため、太鼓の学習者は先に口頭で太鼓のリズムを覚えることから始める。口頭で太鼓のリズムが言えれば、太鼓は叩けると言われている。口頭で太鼓のリズムを言うことを、口太鼓と日本人の愛好者らは呼んでいる。

4　2020年12月現在、ある西アフリカの国でツアーを開催しようとしている、という情報を得たが、本当に実施されるかどうかは疑問である。ツアーではないが、2021年年明けに西アフリカの国へダンス習得のために渡航する人がいるという話も耳にした。

5　12月末にガーナと日本をつないでツアーが開催されるという。基本、受講者は自宅などで受けるとのことだ。

6　金額の変遷については、菅野【2020】で詳細を述べている。

参考文献

インゴルド，ティム（2020）『人類学とは何か』奥野克己／宮崎幸子訳　亜紀書房

菅野淑（2020）「『サバール』を取り巻く人々―日本人愛好者とセネガル人ミュージシャンの事例から―」愛知淑徳大学論集―ビジネス学部・ビジネス研究科篇第16号：45–56

近藤祉秋・木村周平・浜田明範・西真如・吉田真理子（2020）「『COVID-19と文化人類学』ラウンドテーブル開催報告とその後の活動」『文化人類学　85巻2号』：366–369

日本学術会議地域研究委員会文化人類学分科会『日本学術会議公開オンラインシンポジウム　コロナ時代におけるフィールドワーク教育をめぐって』ポスター

中尾世治・杉下かおり編著（2020）「序論―生き方としてのフィールドワーク」『生き方としてのフィールドワーク　かくも面倒で面白い文化人類学の世界』pp. 1–20　東海大学出版部

マリノフスキ、ブロニスワフ（2010）『西太平洋の遠洋航海者』増田義郎訳　講談社